



# 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析

佐藤, 有耕

---

**(Citation)**

神戸大学発達科学部研究紀要, 3(1):11-20

**(Issue Date)**

1995

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81000198>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000198>



## 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析

佐藤 有 耕\*

An analysis of the reasons why high school female students tend  
to belong to classroom informal groups

Yuhkoh SATOH

## 問 題

高校の女子生徒の学校生活では、必ずといっていいほど、特定の集団的友人関係が見られる。学校生活の中で、女子生徒が一人であることは、まずない。ほとんどの場合、誰か友だちと一緒にいる。一人であることは珍しいことであり、一人にならないように気をつけているようにも見える。実際のところ、高校生女子は、一緒に行動する特定の友人たちをクラスの中にもっている。通常、この特定の友人関係は“グループ”と呼ばれている。ほとんどの生徒は、どこか決まったグループに入っている。2つのグループにかけもちで入っていることは少ない。なぜなら、グループは相互に独立しており、排他的な面をもっているからである。

女子のグループは排他的であり、お互いに誰ほどのグループであるというようにひとつの型を決めてしまいがちである(天野, 1975)。相互に独立し、排他的であるという特徴が顕著にみられるのは、昼食の時間である。女子生徒たちは、グループごとに机を寄せあって食事をする。食事を一緒にできる相手がいるということは非常に重要であり、そのためにグループがあるとも言える。グループに入れず、一人で食事をしなければならないのは、みじめなこととしてとらえられる(佐野洋子, 1988)。したがって、一緒に昼食を食べなくなるということは、そのグループから排斥されたことを意味する。著者が教育相談で経験した事例では、ある生徒が3人グループからはざされたことがあった。その生徒は他の2人の生徒から、“今日から一緒にお昼食べられなくなったから”と告げられたのである。これだけで、この生徒は、自分がグループから排斥されたことを理解した。そして、それはその日のうちにクラス内に知れ渡った。いままで一緒に食事をしてきた3人が、2人と1人に別れて食事をするようになったからである。

従来も、「お手洗いフレンド」(天野, 1975)などと呼ばれる関係が指摘されていた。これは、いつでも一緒に行動する2人ペアでの友人関係のことである。しかし、実際には2人ペアというよりも、もっと人数の多い複数の友人関係、すなわちグループという形式が女子の高校生活ではよく見られる。そして、女子のグループの問題は、女子教育に携わるものによって研究されてきている。グループの存在を最初に指摘した研究には、永沢(1969)のものがある。ここでは女子大学生のグループを、ソシ

\*神戸大学発達科学部(発達基礎論講座)

オメトリー的な手法を用いて検討している。そこでは、グループの構成人数は2~6人であると報告されている。その後、天野(1975, 1985)にみられるように、女子高校生を中心として研究が行われてきている。天野(1985)は、女子高校生211名に対する調査の結果、90.1%がグループに入っていることを報告している。これは中学生でも同じで、武内(1993)は中2女子の93%が仲良しグループに所属し、いつもグループで一緒という行動をとることが多いことを報告している。佐藤・落合(1993)は、高1女子では昼食を一定の友人と共にする者の割合が97.6%であると報告する。そして、昼食を共にするグループの人数は4人~8人程度が多いと指摘している。このように、女子の友人関係の特徴として、2人ペアではなく、もっと多人数のグループとしてとらえる見方が優勢である。けれども、たとえば8人グループという人数構成が、ひとまとまりで行動するというのは、不自然にも思われる。機能性からも、親密さからみても、いかにも人数が多すぎるのではないだろうか。しかし、天野(1975)、保坂(1993)が指摘するように、グループの中に2人ペアができていることもある。そう考えると、グループの中にさらに下位グループがあり、下位グループが連合して、ひとつの大所帯のグループとなると考えることができる。人数が多いグループの場合、内部で下位グループがいくつか連合していることが予想される。

グループの問題は、この固定的な友人関係に亀裂が生じたときには、教育相談場面での問題ともなる(橋口, 1993)。なぜなら、グループには閉鎖的・排他的な側面があり、他のグループへの転出はまことに困難だからである。突然クラスの中で孤立してしまうことになり、時には不登校の一因ともなる。また、不登校などから女子生徒を学校に復帰させるような場合には、どこかのグループへ入れるように配慮することが必要な場合もある(菅, 1988)。

さらに重要なことに、女子生徒自身にとっても、グループの存在は必ずしも歓迎されているわけではない。天野(1975)は、女子高校生518名に対して、「女性のつくるグループをどう思いますか」という質問を行なっている。そして女子高校生が、グループに対して、あまりいいものでもないがやむを得ないと思っていると報告している。このように、グループには否定的な側面がかなり存在すると考えられる。保坂(1993)は、女子校のカウンセラーとしての経験から、“生徒は自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている”と述べている。確かに、女子生徒を見ると、ただ楽しくてグループに入っているとは思えないところがある。高校生女子を主人公とした小説の中にも、「グループの人とは、嫌いでも適当につきあっておかないと学校生活が不便になる」という会話がみられる(山田詠美, 1989)。これらのことをまとめあわせると、よい面も悪い面もあるがそれでもグループは必要であり、グループに入っていないことは学校生活を過ごしにくくすることになる。このような高校生女子のグループという友人関係は、どのように理解することができるのだろうか。

本研究では、グループの実態を細かく分析した研究が少ないことから高校生女子のグループの実態を明らかにし、グループという友人関係について理解を深めることを目的とする。そのために以下の3点の検討を行う。

- (1) 高校生女子のグループがどのように構成されているのかを明らかにする。
- (2) 高校生女子が学校生活においてグループに所属している理由を明らかにする。
- (3) グループに所属している理由が、高校生女子のグループ志向とどのように関連しているかを明らかにする。

研究Ⅰ 高校生女子におけるグループの人数構成の実態

目的

高校生女子のグループがどのように構成されているのかを明らかにする。そのために以下の検討を行う。(1)グループの構成人数の分布を調べる。(2)ひとつのグループがさらに下位のグループに分かれているかどうかを検討する。(3)下位のグループに分かれている場合を考慮に入れて、グループの構成人数について検討する。

方法

関東地区にある同一市内の公立女子高校133,私立共学校94,計227名(平均年齢=17.0才,SD=0.61)の高校生女子を対象とした。質問紙調査に含まれていた内容は以下の通り。a.グループの有無, b.グループの構成人数, c.下位グループの有無, d.自分の入っている下位グループの構成人数。a.については、「あなたには、学校で一緒に教室移動したりお昼ご飯を一緒に食べたりするような、決まった友人グループがありますか」という質問文に、「はい, いいえ」で回答してもらった。調査時期は1993年12月。

結果と考察

1. グループの構成人数の分布 グループに入っていない者は227名中3名であった。98.7%の者がグループに所属していた。この結果は天野(1985)の結果と同様であった。高校生女子の場合, 9割以上の者がグループに入っている。構成人数の分布はFIGURE1に示した。佐藤・落合(1993)の結果と同様に, 9人以上から構成される大規模グループは少ない。また, 今回の結果では, 2人ペアからなるグループは少なく, グループは3人以上の人数でみられることが多いと言えよう。

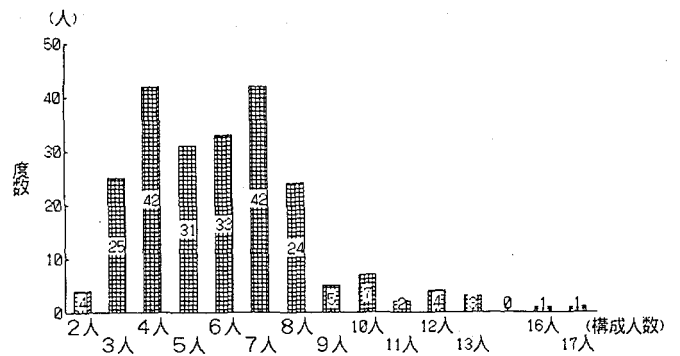


FIGURE1 グループの構成人数の分布(N=224)

2. 下位グループに関する検討 グループがさらにいくつかのグループに分かれていると回答した者は108名, 分かれていないと回答した者が116名であった。ここでは, 複数の下位グループが連合して構成されているものを連合グループと呼び, 下位構成をもたないものを単一グループと呼ぶことにする。単一グループの116名の構成人数の分布はFIGURE2に示した。連合グループの108名の構成人数の分布はFIGURE3に示した。

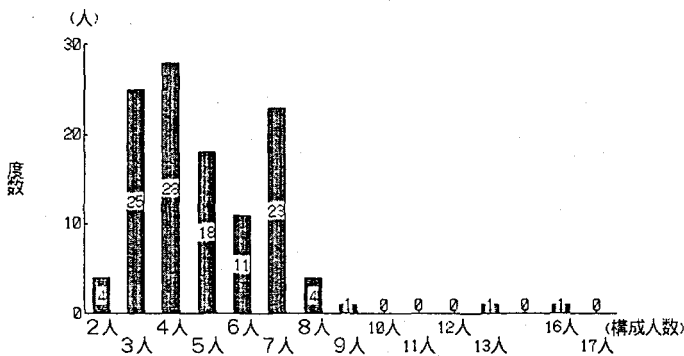


FIGURE2 単一グループの構成人数の分布(N=116)

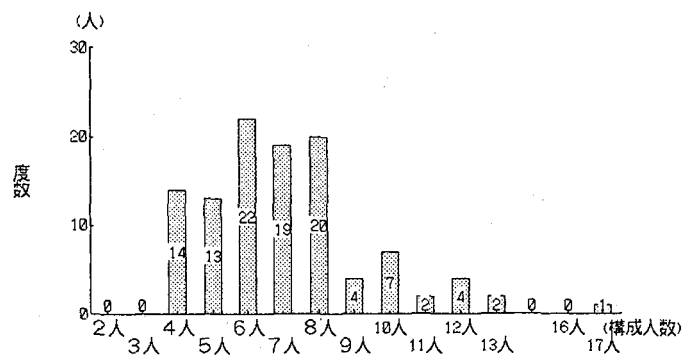


FIGURE3 連合グループの構成人数の分布(N=108)

両者の構成人数の分布をみると、単一グループでは構成人数が3~4人、連合グループでは6~8人が多かった。ところが、天野(1985)はグループの規模について、天野の見てきた限りでは、平均的な人数は4, 5名が多いことを述べている。保坂(1993)も女子生徒のグループの構成人数について、ひとつのグループは大体5~6人であるとしている。確かに連合グループの分布からは、一緒に行動するには多すぎるようにも思われる。しかし、天野、保坂の両者とも、グループの中にさらに2人ペアができている場合があることを付け加えている。昼食は大人数のグループで一緒にとっても、教室移動の際などには、下位グループの単位で行動することもあると考えられる。

3. グループの構成人数の再検討 いくつかの下位グループをもつ連合グループの存在が明らかになったため、グループの構成人数を再分類した。まず、連合グループに入っていると回答した108名を、自分が所属している下位グループの構成人数に振り分けた。それに単一グループの116名を加え、分布を改めて図示したものがFIGURE4である。記入もれがあったため、合計は210名となっている。これによると、グループの三分の二以上が2~4人の構成人数の範囲に含まれる。実際に教師やカウンセラーが印象としてもつグループの構成人数は、実際の調査の数字ほど大きくはない。このようなズレは、下位グループの構成を考慮しないために生じているといえよう。構成人数の平均値と最頻値は、まとめてTABLE1に示した。高校生女子のグループは、単一グループと連合グループに分けることができる。そして、連合グループでは複数のグループが結びついている。そのため構成人数が多く、実際に一緒に行動するには不適切と思われる規模のグループもあることが示された。このことから考えると、グループが形成される背景には、一緒に行動するという以外の要因も含まれることが予想された。

TABLE1 グループの構成人数の平均値と最頻値

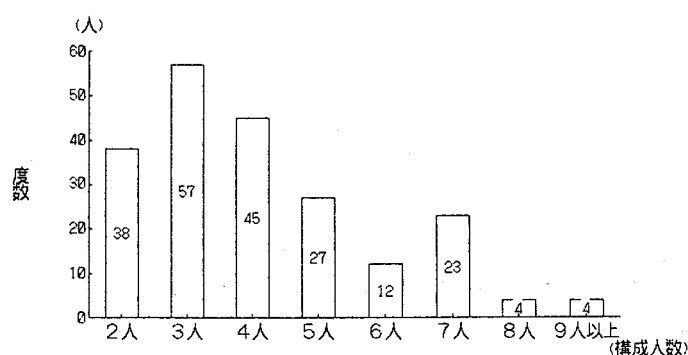


FIGURE4 下位グループまで含めて再分類したグループの構成人数の分布(N=210)

	グループの構成人数	
	平均値	最頻値
全グループ N=224	6.01人 (2.46)	4人と7人
連合グループ N=108	6.95人 (2.56)	6人
単一グループ N=116	5.02人 (2.09)	4人
再分類したグループ N=210	4.17人 (2.01)	3人

( )はSD

## 研究II 高校生女子がグループに所属している理由の分析

### 目的

高校生女子が学校生活においてグループに所属している理由を明らかにする。そのために、以下の検討を行う。(1)女子青年からグループに所属している理由を答えてもらい、それらの理由を整理し、分類する。(2)分類された理由ごとに、それらの内容を表す質問項目を作成する。(3)作成された項目に対する回答を分析することで、高校生女子がグループに所属している理由を明らかにする。

### 方法

グループに所属している理由についての資料収集のため、面接調査を2段階に分けて行った。まず関東地区にある女子高校1年生13名を対象とした第1次面接を行った。13名の在籍するクラスはバラバ

ラであった。面接は、授業時間中を利用し、空いている教室で行った。面接者は大学生女子3名で、それぞれ1対1の面接を行った。続いて関東地区にある大学生女子33名を対象とした第2次面接を行った。面接者は大学生女子5名であった。電話を通しての面接になった場合も一部あったが、1対1の面接を行った。その後、著者と、面接者5名とで、面接結果を整理し分類し、質問項目を作成した。作成された質問項目は、研究Ⅰで調査対象となった227名に実施された。ただし、グループに入っていないと回答した3名については分析の対象としなかった。回答の仕方は、自分がグループに入っている理由として、質問項目がどのくらいあてはまるかを評定してもらう形式であった。評定の際の選択肢は「よくあてはまる」～「全くあてはまらない」までの5件法であった。

### 結果と考察

1. 面接結果の分析 第1次面接に参加した高校生は、13人とも、同じクラスの者だけで構成されたグループに所属していた。グループの構成人数は2～10名であった。最も多かったのは6人グループであった。自分の入っているグループが、グループ内にさらに下位グループを持つ連合グループである者は8名であった。高校生活にグループが必要かという問いに対しては、10名が肯定的な回答をした。しかし、なぜグループができあがるかについては、はっきりした回答はほとんど得られなかった。女子高生の場合、どこかのグループに所属していることは、当然のことと見なされていた。そのため、理由を問われても答えにくいようであった。自分たちが当事者であるため、現状を客観的に説明することは難しいのだと考えられた。そこで、高校時代にグループに所属した経験を持ち、ある程度客観的に分析し、回答できると考えられる大学生女子33名を対象として、第2次面接を行った。

高校時代を回想して回答してもらった結果、グループの構成人数は2～10名以上までであった。最も多かったのは、4人グループであった。自分のグループがさらに下位グループをもつ連合グループであると述べた者は、24名であった。ここでは、グループを維持し続けた理由を中心に、グループを必要とした理由、グループに所属することと所属しないことのメリットとデメリットなどについて回答を求めた。これらの回答を総合して整理した結果、グループに所属している理由について139項目の資料が得られた。

2. グループに所属している理由の分類 グループに所属している理由に関する139項目を分類した結果、以下の8つに大別された。①楽しさ…一緒にいる人がいると楽しいから。②物理的利益…援助してもらえたり、情報が得られたりして得だから。③共行動…一緒に行動できるから。④相談…相談できるから。⑤孤立に対する防衛…一人になりたくないから。⑥周囲から浮くことに対する防衛…周囲の目が気になるから。⑦存在価値の確認…自分の存在価値が確認できるから。⑧なんとなく…グループになるのが普通だから。これら8つの理由ごとに5項目ずつ作成し、計40項目をグループに所属している理由の質問項目とした。

3. グループに所属している理由の分析 40項目に対する回答をデータ行列として、共通性を反復推定し、主因子法による因子分析を行った。初期解において、第2因子と第3因子との間で固有値に大きな差がみられたため第2因子まで抽出した。Varimax回転後の因子分析結果はTABLE2に示した。第1因子に負荷の高い項目は「グループに入っていないと、変わった人だと見られそうだから(.80)」「グループでいないと、周囲から浮いているように見えるから(.78)」「グループに入っていないと、教室にいづらいから(.77)」「ひとりきりでいると、つまらない人だと思われそうだから(.76)」などであった。まわりから浮きたくない、ひとりである人だと思われたくないという気持ちを表す因子と解釈された。これを「浮いた存在になることの忌避」の因子とした。

第2因子は「相談相手がたくさんいて頼りになるから(.77)」「落ち込んでいてもみんなで支えてくれるから(.76)」「グループだとお互いによく知っているので相談しやすいから(.76)」などの項目が高い負荷をもっていた。実際にいつでも一緒に行動することが重要だというより、何かあったときにも支

えてくれる人が自分にはいる, そのような安心を求める気持ちを表す因子と解釈された。これを「複数からの安全保障の獲得」とした。

TABLE2 グループに所属している理由に関する項目の因子分析結果 (Varimax回転後)

項目	FAC.1	FAC.2	h <sup>2</sup>
37.グループに入っていないと, 変わった人だと見られそうだから	.80	.01	.64
29.グループでいないと, 周囲から浮いているように見えるから	.78	-.02	.61
28.グループに入っていないと, 教室にいつらいから	.77	.12	.61
21.ひとりきりでいると, つまらない人だと思われそうだから	.76	-.04	.58
13.ひとりぼっちな人だと思われたくないから	.74	.12	.56
5.ひとりで行動することばかりだと, よくない印象をもたれそうだから	.73	-.09	.54
30.まわりの人たちみんながグループをつくっているから	.66	.00	.44
36.ひとりでいるのは何だか心細いから	.63	.28	.48
4.グループに入っていないと, 休み時間の居場所がないから	.61	.15	.39
7.所属するところがあると, 自分が価値ある人間だと感じられるから	.59	.00	.35
27.学校行事などのとき, ひとりにならずにすむから	.58	.27	.41
35.グループにいれば, 一緒に行動してくれる人が必ず誰かいるから	.57	.30	.41
12.グループの中にいれば安心できるから	.56	.40	.47
11.班分けやグループ作業のとき, あぶれずにすむから	.56	.12	.33
19.自分ひとりで行動するには自信がないから	.51	.21	.30
31.グループでいるときは, 自分が必要とされていると思えるから	.50	.37	.39
6.グループに入ることがあたりまえだから	.49	.10	.25
20.常に誰かと一緒にいたいから	.49	.29	.32
25.グループでいないとつまらないから	.48	.37	.37
3.お昼ご飯や教室移動などが一緒にできるから	.42	.37	.31
2.いろいろなうわさ話を聞くことができるから	.35	.18	.15
40.相談相手がたくさんいて頼りになるから	.13	.77	.61
24.落ち込んでいてもみんなで支えてくれるから	.06	.76	.58
32.グループだとお互いによく知っているので相談しやすいから	.10	.76	.59
16.グループの中では安心して何でも話せるから	.10	.73	.54
17.学校生活が楽しくなるから	.15	.69	.50
8.悩みごとがあるときに, みんなが相談にのってくれるから	.04	.68	.46
18.困ったときにいろいろ手伝ってもらえるから	.17	.63	.43
22.一緒にいるうちに自然にまとまったから	-.02	.60	.36
15.グループの人は自分を頼りにしていろいろ話してくれるから	.30	.59	.44
1.グループでいると楽しいから	.22	.59	.40
33.ひとりでいるよりも, 大勢でいる方がおもしろいから	.08	.57	.33
39.グループの人とは, お互いになくってはならない存在だと感じあえるから	.26	.54	.36
38.なんとなく, 気づいたらグループになっていたから	.01	.53	.28
14.いつの間にかみんなが集まっていたから	.05	.52	.27
23.グループの中では自分の存在を認めてもらえるから	.45	.47	.42
34.興味や関心があることについて情報交換できるから	.06	.45	.21
9.みんなでさわげるから	.35	.43	.31
10.勉強を教えてもらったり, ノートの貸し借りができるから	.35	.41	.29
26.学校生活に必要な情報(試験範囲など)が得られるから	.27	.32	.18
因子寄与(2乗和)	8.69	7.78	16.47
(%)	21.7	19.5	41.2

## 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析

この2つの因子は、グループに所属している理由の裏と表の両面を表わしていると考えられる。第1因子は“入っていないと不都合だ”という消極的な理由であり、第2因子は“入っているといいことがある”という積極的な理由である。自分を守るための安全策としてグループを必要とするという理由と、グループの良さを認め、積極的にグループでいようとする理由とが見出された。高校生女子は、グループがあるといい、楽しいというだけでグループに所属しているのではない。グループに入っていないと学校生活において不都合であるという理由があることが明らかになった。だからこそ、よい面・悪い面があることを知っていても、高校生女子はグループを形成し、グループに所属しているといえよう。

### 研究Ⅲ グループに所属している理由とグループ志向との関連

#### 目 的

研究Ⅱで見出されたグループに所属している理由が、高校生女子がもつグループ志向とどのように関連しているかを明らかにする。そのために以下の検討を行う。(1) 高校生女子のグループ志向を表す項目を文献を参考にして作成し、実施した結果を分析して得点化する。(2) グループに所属している2つの理由があてはまる程度とグループ志向の程度との関連を検討する。(3) グループの構成別にグループ志向とグループに所属している理由との関連を検討する。

#### 方 法

グループ志向の項目作成後、質問項目は研究Ⅰに示した227名に実施された。グループ志向の項目を評定する際の選択肢は「はい」～「いいえ」までの5件法であった。

#### 結果と考察

1. グループ志向項目の分析 グループ志向の項目は、グループでいることを肯定し、グループでの友人関係を志向する傾向を得点化するための項目である。天野(1975)の女子生徒・学生のグループについての記述を参考にして作成された。

女子のグループの問題点として、天野はグループの閉鎖性、排他性について強調している。人間関係がグループの中だけの狭い付き合いになってしまうということである。そこで、グループ志向の項目として、固定的友人関係志向の4項目、閉鎖的友人関係志向の4項目を作成した。これに一般的なグループ志向を示す3項目を加えて計11項目とした。

11項目に関する227名の評定結果を主成分分析(Varimax回転)した。第2主成分と第3主成分との間に固有値の落差がみられたので第2主成分までを採用し、2つの主成分得点を求めた。結果の処理にはこれらの得点を用いた。第1主成分得点を固定的集団志向得点、第2主成分得点を閉鎖的集団志向得点と呼ぶことにする。分析によって得られたグループ志向得点は、2つの内容を表している。ひとつはグループでいることを重視し、一緒に行動してくれる人を求める固定的集団志向である。もうひとつは特定の人たちだけと固まっていたいという閉鎖的集団志向である。主成分分析結果はTABLE3に示した。

2. グループに所属する理由とグループ志向との関連 研究Ⅱにおける、グループに所属している理由の因子分析結果から、2因子について因子得点を推定し、グループ志向得点との間で重回帰分析を行なった。重回帰分析結果を図示したものがFIGURE5である。固定的集団志向得点との関連からは、特定の仲間を持ちたがる気持ちは、「複数からの安全保障の獲得」「浮いた存在になることの忌避」のどちらの理由とも関連していることがわかった。だが、閉鎖的集団志向得点との間では、「浮いた存在になることの忌避」だけが関連していた。「複数からの安全保障の獲得」との標準偏回帰係数( $\beta$ )の数値は、-.07であり有意ではなかった。閉じた人間関係を求める気持ちは、みんなでいるといいことがあるから、という理由では説明されない。学校生活で浮いた存在になることを避けようとする女子生徒



TABLE3 グループ志向に関する項目の主成分分析結果 (Varimax回転後)

項目	Fac. 1	Fac. 2	h <sup>2</sup>
3. グループに入れるかどうかは自分にはとても重要なことだ。	.86	.08	.75
2. グループに入れなかったら高校生活は楽しくない。	.84	.13	.72
4. 一緒に行動してくれる人(たち)がいない学校生活は、たえられない。	.77	.15	.62
1. 学校生活においてはグループが必要だ。	.73	.03	.53
6. いつも決まった人(たち)と一緒にいるのはうとうしい。(一)	.36	-.16	.16
11. 学校では、気のあう人(たち)だけと一緒にいたい。	.03	.74	.55
9. 自分の仲間以外の人とはあまり話したいと思わない。	-.13	.67	.47
7. 自分の仲間にはほかの人とつきあってほしくない。	-.04	.58	.34
8. いつも一緒にいる人(たち)が休んでいる日はゆううつだ。	.24	.57	.38
10. 新年度は、決まった仲間ができるまで落ち着かない。	.40	.46	.37
5. 自分の仲間だけでかたまっているのが、居心地がよくていい。	.44	.46	.41
因子寄与 (2乗和)	3.13	2.15	
(%)	28.5	19.5	48.0

(一)は逆転項目のため、得点を逆転して計算した。

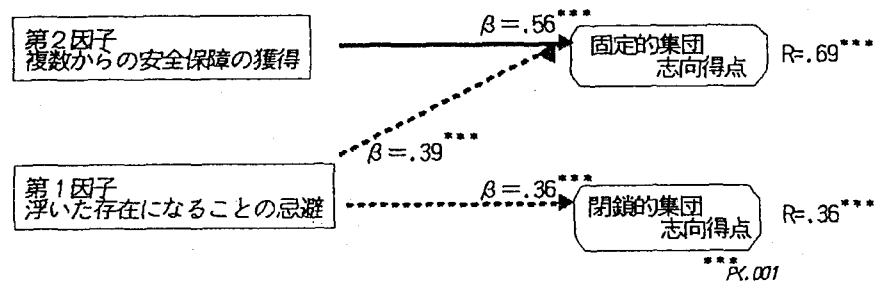


FIGURE5 グループに所属する理由と2つのグループ志向との関連

は、グループを閉鎖的にしていることが考えられる。自分が浮かないために、人間関係の変化が少なく、より関係が密接で安定したものになるように、グループを閉鎖的なものになっていることが推察された。

3. 単一グループと連合グループの比較 下位グループをもつかどうかという点で、グループ構成が異なっていた2つのグループ間の違いを分析した。2グループそれぞれの重回帰分析結果をまとめたものがTABLE4である。

単一グループと連合グループ、どちらの場合も、重回帰分析の結果は同様であった。やはり閉鎖的集団志向得点とは、「浮いた存在になることの忌避」だけが関連していた。ただ、関連の強さから言うと、「浮いた存在になることの忌避」と閉鎖的集団志向得点との間の関連の強さが、両グループ間で若干異なることが示された。単一グループの方が、連合グループに比べてこの関連が強いことが示されていた。

## 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析

単一グループの方がグループの人数も小さく、より閉鎖的であろう。このようなグループを求めた女子は、浮いた存在にならないために、閉じたグループを求めたのだと考えられる。つまり、凝集性の高い、結びつきの濃いグループにいて安心を求めているのであろう。それに対して、連合グループは相対的に人数も多い。このようなグループを求めた女子は、複数の人から安全を保障されようとして、特定のグループを求めたのだと考えられる。つまり、仲間が多く、一人にならずに済む確率の高いグループにいて安心を求めているのであろう。これら両グループの違いは、より少人数で閉じて安定するという質(絆の強さ)を重視したグループを求めた結果と、より多人数で味方を増やして安定するという量(味方がいてくれる確率の高さ)を重視したグループを求めた結果の違いと考えることもできよう。高校生女子は、自分では意識していないのであろうが、学校生活を安心して過ごすためにグループをつくり、安定を求める方略の違いによって、作られたグループの構成が異なるのではないかと考えられた。

TABLE4 構成の異なる2グループ間における重回帰分析結果の比較

〈目的変数〉	「固定的集団志向」		「閉鎖的集団志向」	
	「浮いた存在になる ことの忌避」	「複数からの安全 保障の獲得」	「浮いた存在になる ことの忌避」	「複数からの安全 保障の獲得」
単一グループ n=116	.49*** (R=.69***)	.43***	.46*** (R=.45***)	-.02
連合グループ n=108	.62*** (R=.67***)	.34***	.24* (R=.30**)	-.15

数値は標準偏回帰係数 $\beta$ , ( )は重相関係数R  
 \*\*\*p<.05 \*\*p<.01 \*p<.001

## まとめと討論

研究Ⅰでは、高校生女子の集団的友人関係は、2人ペアというよりも、3人以上からなるグループという形式が中心であり、9割以上の者がグループに所属していることが明らかにされた。そして、そのグループは、単一グループである場合と、複数のグループが結びついた連合グループである場合がある。しかし、さらに分析すると、実際に行動する場合などの小さい単位での結びつきでは、2~4人程度のグループが6割以上を占めていることが明らかにされた。

研究Ⅱでは、高校生女子がグループに所属している理由は、大きく2つにまとめられることが示された。ひとつは浮いた存在になりたくないからであり、もうひとつは複数の友人によって支えられていられるからである。これは、入っていないといろいろな不都合だという理由と、入っているとよいことがあるという理由とも言える。グループに所属することに対して、消極的と積極的の両面の理由が見出された。高校生女子は、グループを肯定的・積極的に受け入れてグループに所属しているだけではない。グループに入っていないと高校生活に不便や不都合が生じるから、よい面・悪い面があってもグループに入らざるを得ないでいることが明らかにされた。

研究Ⅲでは、グループに所属する理由のうち、浮いた存在になりたくないからという理由は、閉鎖的なグループを志向する傾向と関連していることが示された。複数の友人によって支えられていられるからという理由は、閉鎖的なグループを志向する傾向とは関連がみられなかった。学校生活で浮いた存在になることを避けようとする女子生徒は、閉鎖的なグループを求めていると考えられた。

以上の結果をまとめると、高校生女子は、一人で浮いた存在になりたくないから、また、複数の友人に支えられようとして、グループに所属している。グループは、お互いに自分の安全を高めようという、どちらかというと防衛的な目的のために維持されているといえよう。

今回の結果は、学校生活において、一人であることを拒絶しようとする気持ちを高校生女子がもっていることを示した。大きい人数のグループになることも、閉鎖的で変化の少ない関係になることも、極力一人になることを避けるには都合がよい。たとえわずらわしいことはあっても、一人になるよりはグループでいることの方がよいのだと高校生女子は考えているといえよう。

高校生女子が一人であることを拒絶するのには、次のような要因が考えられるのではないだろうか。以前に、旅館などが「女性の一人客お断わり」といったように、女性が一人でいることはおかしいという風潮がある。また、「女性の一人歩きは危険」というように、女性が一人でいることは危険を受けやすいから気をつけるようにという風潮もある。さらに本研究の面接結果では、女子生徒自身も、グループに入らず一人でいることはまわりから友だちづきあいができない人、魅力のない人、変わった人とみられると考えていることが示された。これは、女子がグループになるのは、他者の目に自分がどう映るかを気にするためであるという指摘(久世, 1962)にも一致する。そして、女子生徒は、実際に一人でいることはつまらないとも感じている。このような背景から、一人でいることは避けるべきことであり、複数の人と一緒にいることがよいことだと考えるようになるのではないだろうか。

繰り返しになるが、“生徒は自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力(気の使いよう)をしている(保坂, 1993)”。そして、グループの関係に疲れて来談する者も、グループ内での排斥や分裂から自分自身の価値に疑問を感じて来談する者もある。それがよいものであれ悪いものであれ、女子生徒の中にはグループがある。グループに所属し、関係を保つことは、多くの女子生徒にとっては当然のことであり、かつ重要な問題である。高校における女子生徒との教育相談では、この点を認識しておくことが必要と考えられる。

#### 引用文献

- 天野隆雄 1975 女子生徒の心理とその教育 早稲田大学出版部  
 天野隆雄 1985 女子生徒のインフォーマル・グループ アジア文化, 10, Pp. 87-95.  
 保坂一己 1993 中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について—私立女子校での経験を振り返って—  
 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 15, Pp. 65-76.  
 久世敏雄 1962 友人・異性との関係 (松村・西平編) 青年心理学 朝倉書店 Pp. 114-143  
 永沢幸七 1969 女子学生のinformal groupの発生要因について(その1) 東京家政学院大学紀要, 9, Pp. 17-27.  
 佐野洋子 1988 友だちは無駄である 筑摩書房  
 佐藤有耕・落合良行 1993 女子高校生のグループの成員数と友人とのつきあい方の関係 筑波大学心理学研究,  
 15, Pp. 185-193.  
 菅佐和子 1988 思春期女性の心理療法—揺れ動く心の危機— 創元社  
 武内清 1993 友達関係 教育と情報 422, Pp. 10-15.  
 山田詠美 1989 放課後の音符 新潮社

#### 付記

本研究は、実際には筑波大学人間学類3年生(当時)5名との共同研究であるが、了承を得たのでここに著者の名前で発表する。(共同研究者:石田陽子, 江崎貴子, 及川さなえ, 篠山和美, 長縄美加)